

ゆらのみなとせんげんちようじゃ

## 由良湊千軒長者

### 〔解説〕

宝暦十一年（一七六一）大坂竹本座にて初演。近松半二、三好松洛らの合作による初・中・後三巻の時代物です。説教節「さんせう大夫」などにはじまる「山椒大夫物」の一つですが、物語全体の展開は安寿と厨子王（この作品では対王丸）の悲劇というよりお家騒動物の色合いが強く、説教節などとはかなり異なっています。歌舞伎化もされ、一時期人気を得ましたが、現在では上演もなくなり、文楽でも中の巻の一部の姉弟の苦難の部分を再構成した「山別れの段」が稀に上演されるのみとなっています。

### 〔あらすじ〕

父である岩木判官を策略によって失った安寿と対王丸は、母親らと共に人買いに掠われ、母は佐渡へ、姉弟は丹後の由良で三莊太夫に売り渡されてしまいます。辛い労働を強いられる二人でしたが、元家臣であった元吉要之助によって救われ、父の仇を討ち、生き別れた母を探しだし再会を果たすのでした。

「山別れの段」山での柴刈り、浜での汐汲みの重労働を強いられる安寿と対王丸は、身の不幸を嘆きながらもお互いを思いやって暮らしていました。その境遇のあまりの辛さに対王丸は自害しようとするが、姉の安寿はそれをなんとか押しとどめ、二人は山へ浜へと涙ながらに別れて行きます。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

# 山別れの段

ゆたかなり。

うた人の三十一文字の種となる、由良の湊の風景は、筆に及ばぬ眺めとて、まだとけやらぬ谷の戸の、雪を誘える鶯の、声を春をぞ迎へける。

浮世とは、何時いつの浮世に始まりし、その憂き事の身に積もる、対王丸安寿の姫、人商人ひとあきうりにかどはかされ、三さん庄しょう太夫が手に渡り、賤しずが手業てわざの鎌拐かまおうこ、汐汲しおくみ桶おけの重きより、おもき思ひの父母に、死出の別れ生き別れ、日毎の別れ姉弟きょうだいが、涙の種や別れが辻。

「申し姉様、今日はなほしもお顔のやつれ、お心悪うはござりませぬか。父様にも母様にも、お前一人を力わすら草。煩わすらふてばしくださんすな」

と、くどけば姉もうちしほれ、

「ヲ、姉弟なりやこそその様に、姉を大事にかけてたもる。コレよふ聞きや。毎夜くの折檻が、病にならいで何とせう。奥州五十四郡の主、判官様の忘れ篋がたなといわる、身が、浮世をしのぶ忘れ草と、賤いやしい業の下司げす奉公。毎日く三荷の汐柴、昨日は賤に助けられ、数を合わせし夕べのしぎ。今日は誰が助けてくれふ。サア山へ行きや、わしも一緒に柴刈らふ。サアくおじゃ」

と先に立ち、行けば袂に取りすがり、

「姉様わしと一緒に山へ行て、お前の汐は誰が汲みます。人に汲んで貰ふてさへ、打ち打擲ぶの棒ちようちやくさんばい。辛い苦しい艱難かんなんも、姉弟一緒に居ればこそ、辛抱もなります。ひよつとお前の身の上に、もしもの事があつたらば、わしや何とせうどふせうぞ。サア姉様。浜へお出であそばせ、私もともども汐汲まう」

「ヲ、よふ云ふてたもつたのふ。自らは女子の事、そもじは大事の殿御の子。姉にかまはず山へ行きや」

「イエ／＼わたしが」

「イヤわしが」

と、争ふ思い血筋の親身。泣く／＼しぼる袖袂。対王丸は鎌追つ取り、自害と見るより取り縋り、

「気が違ふたかコレ弟、何故死ぬる」

ともぎ放す、その手を取つて、

「コレ姉様、何故死ぬとは聞こへませぬ。お乳ちや乳人めのとに傳かかれたる姉弟が、今は寒夜の荒筵あらむしろ、賤しい土民

に踏まれたりたたかれたり、口惜しいとも無念なとも、名字の汚れ我が身の恥。姉様止めずとどうぞ殺してくださんせ」

「ヲ、道理じゃ／＼、尤もじゃわいなう。扇の橋憂き

難儀、力と頼む要もちり／＼、跡は足弱追手の危ふさ、

救ふてくれると思ひの外、姉弟のみか母様まで、人買

に売り渡され、有らふ事か有るまい事か、世にも稀な

るこの里の、三莊太夫が胴欲心、売り渡されし悲しさ

つらさ。おいとしや母様は、いづくにござるか知らね

ども、朝夕片時へんじも二人が事、思ひ暮らし泣き暮らし、

さぞ懐かしう思ふてござろ。コレ親子は一世、死んで

未来で逢はるれば、つれない命生きては居ぬ」

と、くどき立つれば弟は、

「なんぼ逢ふと思ふても、どこを尋ぬるしやうどもなし。ましてお弱い生まれ付き、涙の種が病となり、も

しもお隠れなされたら、生きて甲斐なき世の中に、死ぬにも死なれぬ姉弟を、神も仏もこれ程まで、見捨て

給ふか恨めしや」

と、互いにひつしと抱き付き、前後正体泣き沈む、心

ぞ思ひやられたり。

霞。涙ながらにたどり行く。

「いつまで云ふても返らぬ繰り言、遅ふては又難儀。そなたは山で柴仕事、姉も浜へ行きます。必ず〜怪我せぬ様にしてたもや」

「アイそんならお前も怪我せぬ様に」

『頼む〜』も泣き別れ、別れが辻を右左、一足いては立ち止まり、坂へかゝれば

「コレ対王、まだ四方山よむやまに残る雪、手足も凍へてたまるまい。必ず木の根につまづいて、谷へ落ちてたもんなや」

と、云ふも次第に遠ざかり、

「ヲ、イ〜」

と姉弟が、同じ思ひに引く足の、

「姉様汐にさそはれて、流れてばし給はるな」

と、影身ゆるまで延び上がり、呼べど答へも山彦の、音はこだまか松の風、拭き払ひ行く汐衣、姿隔つる春

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。